

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

東北と関東を襲った巨大地震と津波で多くの命が失われた。連日の報道によって伝えられる、乾く間もないたくさんの涙。行方不明の家族を探して、道端にしゃがみこんで①泣き崩れる人。もう会えないのではないかと思っていた人と再会できて②泣く人。避難所で支援を受け、③涙を浮かべる人。福島第一原子力発電所で注水作業にあたり、会見に臨んで思わず涙ぐむ東京消防庁の人たち。津波に破壊され瓦礫の山に変貌した町を歩きながら「もう涙も出ません」。そう④つぶやく人。⑤人々の両目からこぼれる涙が、ひとつの流れとなつて、テレビを見ているこちらの両目から入りこみ、からだの内壁を伝い落ちては見えない暗がりには溜まる。溜まっていく。

卒業したら父の跡を継いで漁師になるつもりだったという高校生。津波で家も漁船もなくなつた。「でも、この海が好きだという気持ちに変わりはない」。録音された直接の声ではなく、まとめるかたちで、テレビがそう伝える。⑥はつとする。めちやくちな被害を与えた海だけれど、だから嫌いになつた、とはいわない。だからもう見たくもないとは、いわない。⑦海と向き合うとはそういうことなのだ、とわかる。というより、海に限らずなにかと真剣に係わるとは、そういうことなのだろう。災害と海そのものとは、別。高校生の簡潔なひとは、思いの複雑さを幾重にも滲ませていた。どんなことがあっても三陸の漁業を再興しようと思ふあがる漁港の人々。これまで自分も、この海の恩恵をどれほど受けてきたことだろうと、画面を見つめる。震災前の町の地図がaウツる。湾の内側に、ワカメ、と字が見える。津波の舌は、ワカメの採れる場所もbエンガンの町も、あつというまに舐めつくしてしまった。破壊の後には、新たな誕生がきつと来る。

千年ほど前にも、同じ地域へ津波が押し寄せたことがあるという。山の方まで波が及んだ、と。だが、古い記録なので、本当かどうかわからない、とされてきたらしい。なんということか、記録の内容は本当だったのだ。そのときにも、数多くの集落や人命が失われただろう。たくさんの涙が流れ、居場所dのわからない人を探す人eの聲があちこちで飛び交ったことだろう。そうして、破壊された後には、草が少しずつ芽を伸ばすように、暮らしがふたたび、かたちづくられていったことだろう。世代が重なるにつれ、山の方へもどいた津波は、過去の出来事になっていった。⑧言い伝えと化し、箱のなかに眠る標本のようにおとなしいものになっていったのかもしれない。言い伝えは、⑨あなどれない。涙が塩辛いのは、生きものの祖先が大昔、海にいた名残だという。海に多くを奪われた人の目にも海がある。ヒトはそういう生きものだ。こぼれる。海がこぼれる。いくらでも。

(蜂飼耳「涙」)

問一 ― ①③の涙にはどのような気持ちがかめられていますか。最も近いものを次から選びなさい。

ア 絶望 イ 感謝 ウ 不満
エ 喜び オ 驚き カ 怒り

問二 ― ④とありますが、「つぶやく」の辞書に出ている意味を次から選びなさい。

ア ひそひそと小さな声で話す
イ ぶつぶつとひとりごとを言う
ウ もごもごと口ごもりながら言う
エ べらべらとよどみなく話す

問三 ― ⑤とありますが、次の文はどのようなことの比喩ですか。それぞれ書きなさい。

1 「テレビを見ているこちらの両目から入りこみ」
2 「見えない暗がりには溜まる」

問四 ― ⑥「はつとする」とありますが、この時の筆者の気持ちを次から選びなさい。

ア まだ漁師にもなっていない高校生がすでに漁師としての海への思いを語れることに深い感嘆をもらしている。
イ 津波で家も漁船もなくなった高校生の気持ちを、テレビが代弁しようとしていることに怒りを感じている。

ウ 津波で何もかも失った高校生がなお海が好きだということを聞いて、そのまつすぐな思いに心を打たれている。
エ 本当は海のことをもう好きでいられないはずなのに、テレビの前で懸命な様子を見せる高校生に胸を痛めている。

問五 ― ⑦とありますが、「海と向き合う」とは海に対してどのような態度を取ることだと筆者は考えていますか。説明しなさい。

問六 ― ⑧のようになっていったものは何ですか。次の文の□に文中の語を用いて三十字以内で書きなさい。

□は箱のなかに眠る標本のようにおとなしいものになっていった。

問七 ― ⑨「あなどる」の使い方が適切なものを次から選びなさい。

ア いそがしい時は宿題をあなどりがちだ。
イ 思いがけずしたくにあなどってしまった。
ウ 今日の出来事はいつまでもあなどるだろう。
エ 負けた原因は相手をあなどったことだ。

問八 この文章で、筆者の感じていることと最も近いものを次から選びなさい。

ア 巨大地震と津波で被害を受けたが、わたしたちは豊かな感受性でその事実を受け止め、人生を歩んでいく力を与えられている。

イ 巨大地震と津波で被害を受けたが、わたしたちは困難の中で体験を共有し、どのような時もはげましあつて生きていきたい。

ウ 巨大地震と津波で被害を受けたが、わたしたちは過去の痛みを忘れて、前向きに生きていく姿勢の大切さを改めて確認した。

エ 巨大地震と津波で被害を受けたが、わたしたちは常に希望を忘れず、あたらしい世代の真剣な思いをエネルギーに進するだろう。

問十 c 来るの尊敬語を書きなさい。

問十一 d、eののと同じ働きのものをそれぞれ選びなさい。

ア 彼は病気なだから、親切にしてあげなさい。

イ 先生になるのに必要な勉強をする。

ウ 姉の本を借りて読む。

エ 友達晴子さんと遊びに行く。

オ 雪の降る日が待ち遠しい。

問十二 次に挙げる「涙」に関する表現について、() に当てはまる語をひらがなで入れて完成させなさい。

1 サッカー大会で優勝を目指したが、決勝戦で四対三で涙を

() だ。

2 いつも厳しいコーチが泣いている。() の目にも涙だ。

3 子役の演技が、あまりにいじらしくて、観客の涙を() た。

問九 a、bのカタカナの言葉を漢字に直して書きなさい。

〈余白は下書きに使用しても構いません〉

一 一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

中学一年になったとたんに、シンサクは、がぜん、働き者になって、家じゅうをびつくりさせた。だれもなんとも言わないのに、日曜日になると、朝早くから、べんとうを持ってとびだし、夕方、aサツをにぎって帰ってくる。去年、洪水で落ちた橋の修繕の土方よその家のこやしうんばんの運搬、なんにでも出かけていった。

このころは、百姓も不景気ふけいきで、家に入れば、①小言こごんきり出ない父ちゃんも、「やっぱ、中学に入ると、べつだな」という感想をもらし、母ちゃんなどは、ときどき、「シンサク、帰りにナットウ三千円買ってきてけろな」とたのんだりする。

そういうときは、母ちゃんは、金をよさない、母ちゃんのサイフに金がないからだ。シンサクは、自分の箱から三千円出しながら、②ちよつといい気もちになる。父ちゃんたちは、小さい子ばかりの家のなかに、シンサクというかせぎ人がでたことを、うれしく、bチヨウホウに思っているのだ。

けれども、シンサクにしてみれば、そうチヨウホウがられてばかりもいられないのだった。③シンサクには決心したことがあるのだ。

四月十日、cシンチクされた中学校のりっぱな講堂で、dセイダイな落成式兼始業式があった。村長さんはじめ、えらい人の演説があったあとで、シンサクたちもおeイフいの菓子包みをもらった。それからわいわい言いながら、二階の新しい教室へ上っていった。

先生も小学校のときのタケシ先生が、生徒といっしょに中学の先生になったのだから、④みんなの意気は、天をつくようだった。先生は、もったいないほどきれいな黒板に字を書いて、中学生たるfコロコロ、新しい教室の掃除のしかたをいつて聞かせたあとで、

「さあ、何かまだ聞きたいことがあるか」と聞いた。

「ハイ」勉強のときには手をあげたことのない、愛嬌者のトキオが言った。

「おい」と先生が指す。

「先生、今度の遠足、どこしよ？」

シンサクをぬかして、みんなが笑った。

「おめえ、遊ぶことばかり考えてるな」先生も笑いながら叱ったあとで、少しましめな顔になり、「今度の春の遠足は、金のかからないように近いところにする。そのかわり、夏はハツコヤマ登山だ。人生には、たのしいことも、苦しいこともある。おめえたちも、これから、人生の坂をのぼりはじめるところだ。⑤それで、先生、考えて、記念のために登山を計画したんだ。みんな、夏までよく家の手つだいしろ」

教室のなかには、ちよつとま、息をのんだように静かになって、それから、まえより大きくわア……という声があがった。

⑥シンサクは、胸のなかで、スウと寒くなった。遠足と聞くと、いつもそうなるのだ。遠足といえは、いつも「いかせる、いかせない」で、家のなかがもめて、けつきよく、いままでも一度も遠足というものにいったことがない。

「ああ、父ちゃん、なんと言うべや」

先生は、説明を続けていた。登山だけなら、食い物のほかは、金ばかりかからない。だが、帰りに温泉で一泊したい。それには、三百五十円くらいあれば、いいだろう。

「よし、おら、自分で金ためる！ 五百円ためる！」

みんなガヤガヤさいわいでいるなかで、シンサクは、ひとり、深い穴のなかに座っているように、だまりこみながら、こう決心したのだ。

はじめて出た橋の土方で七十円とった。みやげにナットウを買って、三十円へった。次の日曜日、橋の材料がつきにがんばって、百円。けれども、母ちゃんに七十円借り⑦られた。はじめのうちは、⑧まるで雪のなかで北風にむかつてめくように、一歩前進二歩後退のときもあったが、それでも、貯金箱のなかのサツは、シリシリとたまっていった。

それにカッコウが鳴きだして、田植えがはじまると、もつこつちのものだった。ハナトリ、シロカキ、苗はこび。そこらじゅう仕事だらけ、といふことば、つまり金だらけとい

うことだった。二週間の農繁休暇中に、たちまち五百円は突破した。けれど、シンサクは働くのをやめなかった。やめれば、五百円は砂に吸われる水のようになくなるからだ。外で仕事をしているとき、ふと気がつく、赤んぼのときから目のなかにあったハツコマ山の背中が、低い山なみの上から、こつちを見ている。ところどころに雪のこつて、⑨白まだらの大蛇がとぐる巻いて、ねているようだ。あの背中、ドンドンとふんづけてやるぞ！ シンサクは、田のアゼをとんで歩きながら考えた。

○

七月二十二日の朝、先生から登山旅行の注意があった。二十四日の朝、六時半、校庭集合、七時出発。金は二千三百、当番が集める……

「あんまりうまくいきすぎちゃった」シンサクは、箱のなかの八百何円かを思いだし、⑩からだじゅうムスムスしながら、こう考えた。

「あまりは、母ちゃんにやる。母ちゃんが、けさ、いもを早掘りして売りにいくついったの、とめんべ」

あかるい気もちで家のそばまでくると、子どもたちが、ふつうでない顔で、馬屋をのぞきこんでいた。シンサクはすぐ寄っていった。

「べこ(牛)、母ちゃん、畑にいるまに、なまいも十貫め食った。いま、獣医さん来て下剤かけて、ビリビリくだしたんだ。千円とられた」妹のシズ子が、まるでおとなのような顔で、シンサクを見あげて言った。

ああ、やつぱり！ だめか！

シンサクは、胸がスウとつめたくなった。すぐ裏から納戸にかけこみ、貯金箱をあけてみた。箱はからだった。

⑪次の日、シンサクは腹がいたいと言って起きなかった。

ひるすぎ、シズ子が学校から、通信簿と先生の手紙を持ってきてくれた。成績は六年のときよりずっとよくなり、手紙には、⑫あしたはべんとうだけ持つてこい」と書いてあった。シンサクは、その手紙をまるめて、涙をふき、はなをかんだ。

○

七月二十四日、快晴。

六時半……七時。みんな家にいなくなり、母ちゃんも少しして出ていったが、やがてパタパタぞうりをならして帰ってきた。

と思つまに、いきなり、シンサクは、たたきおこされた。

「シンサク、おきろ！ ほれ」

ふとんからひきずりだされてみると、わきに丸く何かつまったリュックサックがあり、その上にサツがおいてあった。

「なんだ、いまになって！ もつみんな、いつてしまったぞー」

泣きながらしゃぶりつくシンサクを、母ちゃんはおさえつけるようにして、服を着せ、リュックをしょわせると、その手にしっかりサツをにぎらせて、家からつきたした。

「登山口まで、トラックにのせてもらえ！ にぎりめし食いながら、いけ！ ぜに、なくすな！」

シンサクには何も聞こえなかった。何も見えなかった。シンサクは走った、走った、宙をとんだ。横森をぬけ、県道へ。そこを十丁ばかりつつ走って山道へはいると、あとば上り道だ。目がかすみ、息がくさくなった。

⑬半死半生で最初の峠に立つたとき、ああ、下に広がる青田の間を細い細いへびのように、ゲジゲジのような行列が、這うように動いていた。

シンサクは、⑭こんなに美しいものを見たことがなかった。

シンサクの目のまえで、その行列は、静かに静かに天までのぼってめくように思われた。

(石井桃子)「ハツコヤマ登山」

問一 a～fのカタカナの言葉を漢字に直して書きなさい。

問二 ①「小言きり出ない」の意味を次から選びなさい。

- ア 小言がきりもなく出てくる イ 小言が何としても出てこない
ウ 小言ばかりが出てくる エ 小言さえ出すことができない

問三 ②「ちよつといい気もちになる」とはどんな気持ちですか。最も近いものを次から選びなさい。

- ア お金をよこさない母ちゃんと、文句も言わずにだまって箱からお金を取り出すことができる自分とを比べて、優越感にひたっている。
イ 自分のわずかなかせぎでも両親にたよりにされていることを自覚し、また家族の役に立っていることに、ほろしさを覚えている。

ウ 母ちゃんのサイフにはお金がないのにもかかわらず、自分の箱には大人のかせぎ以上の金額が入っていることをうれしく感じている。

エ 自分が働いてかせいだお金をナットウ代に使われてしまうのはいやだが、家族が喜んでくれていることに、おおかた満足している。

問四 ③「シンサクには決心したことがあるのだ」とありますが、それはどのようなことですか。十字以上十五字以内で書きなさい。

問五 ④「みんなの意気は、天をつくようだった」とは、生徒たちのどのような様子を表していますか。次から選びなさい。

- ア とてもはりきっていた イ とてもなまいきだった
ウ とてもがっかりした エ とてもびつくりした

問六 ⑤とありますが、先生はなぜ登山が記念になると考えたのでしょうか。文中の語を使って五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問七 ⑥「シンサクは、胸のなかで、スウと寒くなった」のはなぜですか。その理由を次から選びなさい。

ア 家の中の働き者としてがんばっているのに、登山に行くとそのぶん働くことができなくなり、自分をあてにしている家族が困ると思ったから。
イ 教室が静かになったことで、クラスの友人達の緊張している様子が痛いほど伝わってきたため、おどろきと息苦しさを感じてしまったから。

ウ 遠くに高くそびえて見えるハツコマ山登山のことを想像し、自分もいよいよそれに挑戦すると思つと身が引きしまる思いがしたから。

エ 遠足が近づいたとき、家にお金がないために行けないのではないかと悩んでいたため、また同じことになるのだろうと不安を覚えているから。

問八 ⑦「られと同じ使い方をしている「られ」を含む文を次から選びなさい。

- ア なんとなく人の気配が感じられる。
イ 失敗作をみんなに見られた。
ウ 先生はどこかに出かけられた。
エ 彼女ならどんな困難も乗りこえられる。

問九 ⑧「まるで雪の中で北風にむかつてゆくように、一歩前進二歩後退」とありますが、これはシンサクのどのような状況を表しているのか、説明しなさい。

問十 ⑨「白まだらの大蛇がとろろ巻いて、ねているようだ」とありますが、シンサクにとってハツコマ山はどのような存在なのか、次から選びなさい。

ア 自分が苦勞したためたお金をあつという間に飲み込んでしまうような不気味でおそろしい存在。

イ 自分が小さい時から身近にあり、いつも仲良く遊んでいる動物のように親しみを感じる存在。

ウ 自分の前進をはばむようになってこわい相手ではあるが、立ち向かっていく意欲をかきたてられる存在。

エ 一見簡単には近寄れない美しく神聖な場所に思えるが、足をふみ入れるすきを見せている存在。

問十一 ⑩「からだじゅうムズムズしながら」とありますが、この時のシンサクの気持ちを次から選びなさい。

ア 自分が努力してかせいだ金額を、早く母ちゃんに報告してほめてもらいたい。

イ うまくいきすぎたこの後には落とし穴があるかもしれない、いやな予感がしている。

ウ 今まで手にしたことのない大金を持ってしまったため、何となく落ち着かない。

エ 思った以上に計画が順調に進み、登山にも行けるのでうれしくてたまらない。

問十二 ⑪「次の日」とはどんな日ですか。

問十三 ⑫「あしたはべんとうだけ持つてこい」とありますが、先生の真意はなんですか。二十字以内で書きなさい。

問十四 ⑬「平死半生」のように、次の□の中に反対の意味になる漢字を入れて四字熟語を完成させなさい。

ア 裁判官にとって最も重要なことは 1 平 無 2 な姿勢だ。

イ その規則を守る人はなく、今や有 3 無 4 なものとなっている。

ウ この店の商品は 5 6 混交で、よいものばかりではない。

問十五 ⑭「こんなに美しいものを見たことがなかった」とありますが、この時のシンサクの気持ちに最も近いものを次から選びなさい。

ア 自分だけの力で山を登りきった自信が、細い行列を見ることでいつそう強く感じられている。

イ 今までお金のことしか考えなかった自分を恥じ、みんなと一緒に登山できるうれしさを味わっている。

ウ 一度は無理かとあきらめかけていた登山に参加できるようになり、すがすがしい喜びでいっぱいになっている。

エ 山の自然の神々しさに心を打たれ、美しい自然と自分が一つにとけ合うような感動を覚えている。

オ 今まであこがれていた行事に自分も参加できたことから、参加させてくれた母への感謝の思いがわきあがっている。

[]

問十一	問九	問七	問六		問五		問三		問一	
d	a						2	1	①	
e	る	問八								②
			b							
問十二										③
1										
										問二
		問十								
2										
3										

[illegible]